
だいたい全部コイツのせいです

本知そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だいたい全部コイツのせいです

【Zコード】

Z5288BA

【作者名】

本知そら

【あらすじ】

とある高校に通う明坂颯太は、生徒執行部という特にやることもなく、その日の思いつきで部活動を決める、ゆるい部に所属していた。同じ部で同じ2年の立仙茜に無理矢理巻き込まれ、先輩の五百藏桜からは暖かい目で見守られる毎日。1年の間城つかさとさきの双子を加えた総勢5人の小さな部で起つる、ビーでもいい話。

プロローグ 「正義の鉄槌が君を裁く」 「正義の欠片もないだい

チャイムが鳴り、やる必要があるのか甚だ疑問なホームルームが終わる。担任の先生がプリントから顔を上げて氣だるげに挨拶を促し、それを受けて日直が立ち上がると、こちらも氣だるげに「起立、礼、着席」の3点セットを唱えた。

太陽が気持ち東に傾いた午後3時の放課後。籠から放たれたハトよろしく、若さ溢れるクラスメイトの皆々様が我先にと教室を出て行く。それをなんとはなしに眺めながら、机の上に置いた鞄を枕にして上半身を倒す。

「ふあ……」

漏れ出た欠伸を噛み殺す。最近徹夜続きのせいで寝不足だ。特に今日は5限の体育の疲れも合わさって酷く眠い。

「よお颯太、そつた今日も眠そ^うだな」

通りかかった加志崎祥平が俺の席の横で立ち止まり、声をかけてきた。

「今日も部活に行かないのか？」

眠気でいつもより細くなつた目を祥平に向ける。

「行かねーよ。あーあ。せっかく部活のことを綺麗サッパリ忘れて清々しい気持ちでいられたのに、なんで思い出させるようなことを言つんだよ。鬼か？ 悪魔か？」

「いや、お前が部活のこと忘れるだなんてこと、絶対にあり得ないだろ。な？」

「……」

無言でサッと目を逸らす。祥平がそれを見てため息を漏らす。

「でもいいのか？ お前2年になつてからずっと部活に行つてないんだろ？」あかね茜に怒られても知らないぞ？」

『茜』という単語を耳にした途端、心拍数が跳ね上がり、背中を嫌な汗が伝う。

「あ、かね……だと……？」

自然と田を大きく見開く。数秒思考が停止し、気づいたら机をバンと叩いて立ち上がっていた。

「ず、ずずずつとつて、まだまだ一週間もたた経つてねーよ……い、い、い五日だよ！」

「いやお前動搖しすぎだろ……」

若干祥平が引いている。だが今の俺にそんなことを気にしている余裕はない。

「し、してねーよ。……い、至つて冷静だ」

「そ、そとか。それならいいんだ」

祥平が一步後ずさる。俺は肩が息をしながら座り直す。

少し息を整えてから口を開く。

「俺のことはいいから、とつとと部活行けって。来週バスケ部は試合なんだろ？」

「おつとそうだった。じゃあな。背中には気をつけろよ」

「お、おつ」

祥平が教室を出て行くまで見送り、そしてすぐに振り返る。窓際の席だから、もちろんあるのは壁と窓だけ。そこに西はいなかつた。

……祥平のヤツ、驚かせるなよ。

ほつと胸を撫で下ろし、教室を見回す。いつの間にか教室には俺以外誰もいなかつた。

せつかく寝るには絶好の環境なのに、祥平のせいで田がさえてしまつた。仕方ない、帰ろう。家に着く頃にはまた眠気がくるだろう。鞄を持って席を立つ。教科書類は机とロッカーに置きっぱなしにしてあるので軽いもんだ。

「さて、今日の夜は何を……ん？」

ズシンと校舎が揺れるのを感じた。机がガタガタと音を鳴らし、置きっぱなしだった誰かのシャーペンが机の上から落ちて俺の足元まで転がつてくる。

揺れはすぐに収まった。

地震か？ それにしては揺れが短かったような。

シャーペンを拾い上げ、落ちないように机の中に放り込む。顔を上げたところで、またズシンと校舎が揺れ、同時に何かがぶつかるような音が聞こえた。

地震じゃない。なんだ？ この何かが校舎の壁に体当たりしているような音と揺れは？

音は外から聞こえるようだった。それを確認しようと俺は振り返つた。

「いいっ！？」

飛び込んできた光景に目を疑つた。

なんと教室の壁が内側に膨らみ、大きなヒビが入っていた。その膨らんだ中心部ではコンクリートがボロボロと崩れ落ちて、鉄の棒のようなものが見え隠れしている。

な、何をしたらこんなことになるんだ？

事態がまったく飲み込めない。窓の外を覗けば少しは分かるだろうか。

そう思つて一步前に出た。そのとき

ドーンと轟音が響き、校舎が一際大きく揺れた。同時に砂埃が舞い上がり、周りがまったく見えなくなつた。すぐに揺れが収まる、代わりに何かのエンジン音と瓦礫が崩れるような音が聞こえてくる。呆然とするなか、ゆっくりと視界が晴れていく。机や椅子は散乱し、窓ガラスは全て割れていた。

そして視界が完全に晴れ、そこに俺が見た物は、壁に空いた大きな穴と、その穴を空けたと思われるショベルカーの先端にあるショベル（正式にはバケットといつらじい）だった。

なんでショベルカー？

まず最初に浮かんだ疑問はそれだった。それ以前に、どうして壁に穴なんて空けたのか、の方が重要だと思ったのだが、たぶん俺は動搖していたのだろう。あとになつて思った。

「セキュリティーガザルだなあ。これで生徒の安全を守れるの？」

いや誰もショベルカーで壁をぶち破ろうだなんて思わねーよ。そ
うツツ「ミミを入れようとしたところで、俺は気づいてしまつた。
すぐに逃げよつ。そう思つたが遅かつた。彼女と田が合つてしま
つた。

身構える俺。彼女、立仙茜じっせんあかねは微笑みを浮かべる。が、すぐにつり
目がちな田をさらにつり上げ、俺を指差して叫んだ。

「ヘルメットも安全帯もしてないなんて、危ないな！」

「壁に穴を空けるお前の方がよつほど危ねーよ！」

「ボクはちゃんとヘルメットも安全帯もしてる。どじが危ないんだ

？」

「格好の問題じゃねーよ！ その穴を空ける行為そのものが危ね
つて言つてんだよ！」

「ちゃんと颯太以外いないことを確認してからだから大丈夫。ボク
に間違いはない」

「間違いだらけだろーが！」

俺の声を無視して、茜がふんつとない胸を張る。つて、安全帯つ
てなんだよ。あの腰に巻いたベルトのことか？

それにして、自称身長145センチ（実際はもつと低いと思わ
れる）のミニマム女子高校生が、黄色いヘルメットを被つて腰に無
骨なベルトを巻き、ショベル（バケット）に乗つて登場とはシュー
ルすぎる。しかもクオーターの証である金色の長い髪と青い瞳、そ
して透き通るような白い肌が、今の光景に酷くミスマッチだ。

「まつ、それはおいといて……ボクがここに来た理由、分かるよね
？」

「な、なんだろ？ 検討付かないな。ははは……」

俺が乾いた笑いをする。茜は微笑みながら、ショベルから飛び降
りてこちらに近づいてくる。

あ、おしい。もう少し高く飛べば見えたのに。

……いや、こんな状況でそんなこと微塵も思つていません。

……嘘です思いました。

「4日と21時間振りだね

「二、細かいな」

俺が一步下がると、茜が一步前に出る。に、逃げられねええ……。

傍から見れば茜は本当に心底微笑んでいるように見えるだらう。だが俺はみてしまった。

茜のこめかみの辺りに、青筋が浮き出でているのを。

「あ、茜。ちょっと待ってくれ。これにはちゃんととした理由が」「言い訳はいい」

腕を掴まれた。

「ひいい！？」

身長差20㌢以上もある女子高生に腕を掴まれて悲鳴を上げる男子高校生。

「どーしてもしたいなら後で聞くけど。今はいいや」

凄い力で掴まれ、逃げることも出来ずに連行される。教室を出て、廊下を歩く茜にズルズルと引っ張られる。すれ違う誰もが俺に同情の視線を向ける。同情するなら助けてくれ。

「あ、茜。どこへ向かってるんだ？」

僅かな希望の欠片もないが、一応確認の意味も込めて聞いてみる。

「もちろん、ボク達、生徒執行部の部室だよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5288ba/>

だいたい全部コイツのせいです

2012年1月14日17時34分発行